# 発達障害の早期発見・早期介入のあり方に関する研究
## (分担研究：発達的観点から見た療育指導のあり方に関する研究)

分担研究者　小西行郎
研究協力者　白瀧貞昭[1]、松川悦之[1]、宮口幸治[1]、柏木宏介[2]

要約：
発達障害の早期発見･早期介入を図るためには日本の１歳半健診を用いて発達障害に対するハイリスク児をピックアップし、以後、短期間の間隔を置いて発達評価を繰り返しながら、早期介入を始めていくのが有効な手段であると考えられる。そのために、１歳半健診の場で発達障害ハイリスク児を見つけるためのチェック項目の検討と、この選択された項目を実際に１歳半健診の場で応用してみて、得られた結果を検討することを目的として本研究を行った。母子愛着関係の確立、共同注視機能、母親参照視などの行動指標が自閉症、発達遅滞、特異的発達障害の早期発見のために有効であることを確認した。
見出し語：１歳半健診、母子愛着関係、共同注視、広汎性発達障害、特異的発達障害

緒言：

種々の障害･疾患の早期発見･介入のためにそれがはっきりと顕在化する前にその障害のリスクを高く有する子どもを把握し、何らかの治療的介入を開始することが多くのメリットを生むことが認識されている。このような障害の早期発見･介入の作業は明らかに、すべての乳幼児に対する健康審査の作業と連動している。幸い日本の保健所では世界に誇り得る、すべての乳幼児を対象とする健診審査制度が早くから実施され、実際に健診に参加する受診者の数も全体の９０％に達するほどの高さを誇っている。

ただ、従来、健診では子どもの発達上の問題点、異常性の疑いなどが早期から指摘はされるが、それに対する早期からの治療的介入が十分、実施されていなかったという欠陥があったが、これも近年、急速に改変されつつある。脳性まひに対する早期発見･療育がこのような乳幼児の健診制度と連動して成果を上げているのは承知のことである。発達障害のそれ以外の分野にも同様の成果が期待されている。本研究では発達障害の早期発見のための１歳半健診でのチェック項目をどのように設定するのが良いのか提案するための考察と、これを利用したフォローアップの結果を示すことにする。

研究方法：

我々が健診に参加している兵庫県明石市の１歳半健診のチェック項目を検討し、発達障害の早期発見のための必要なチェック項目を新たに提案する。また、このチェック項目を用いてピックアップしたハイリスク幼児のフォローアップ結果をまとめて検討した。

結果：

１．明石市における従来の１歳半健診問診票項目

一般事項、生活習慣、保育環境の他に、発達に関する項目として、視線が合うか否か、呼名に反応するか否か、鉛筆を持ってなぐり書きをするか、人のしぐさの真似をするか、数語の有意味語があるか、簡単な言語指示に従えるか、言われた動物の名を絵の中で指さしできるか、他の子どもに関心を持つか、気になる癖があるか、などであった。

２．１歳半健診で発達障害の早期発見のためのチェック項目を考える際に考慮しておくべき事柄

（１）「至適性概念（optimality concept)」の採用
（２）「ハイリスク概念」の採用
（３）発達の前方視的、縦断的フォローアップへの観点の変換
（４）フォローの過程で頻回に評価を行う
（５）ハイリスク児を同定するための指標は確定診断のための指標とは異なることをよく認識しておく必要がある。
（６）フォローアップ過程での評価法も子どもの発達段階に応じて種々異なった評価法が必要であることも認識しておくこと。
（７）ハイリスク児であっても年齢と共に発達をしているのであるから、それぞれの段階で示される特徴は発達段階依存性を示す。この発達段階依存的な表現を明らかに出来るような評価法を準備しておかなければならない。
（８）種々の発達段階は互いに連鎖をなして序列的に並んでいる。後の段階は前の段階の結果であり、同時に後の段階の原因となる。この連鎖の中で、ある段階を常に後の段階の原因として捕らえることはかなりの恣意性が含まれていることを認識しておく必要がある。

１）神戸大学医学部精神神経科 (Dept. of Neuropsychiatry, Kobe University School of Medicine)
２）狭山病院精神科 (Dept. of Psychiatry, Sayama Hospital)

3．発達障害の早期発見のために1歳半健診時に評価すべき発達チェック項目

発達障害と将来診断されることになる幼児で言語発達障害、運動発達障害などの背後に社会性障害の徴候を持っていないかどうかを把握しておくことは将来の予後を知る上で重要であると筆者らは考えている。なぜなら、社会性障害を持つ上に、言語障害を持つ児と単に言語障害だけを持つ児とでは将来の言語障害の改善には大きな差があり、前者の方ではるかに予後は困難である。そこで、1歳半健診で社会性障害の有無を知ることが出来るようなチェック項目が必要であるが、母子間愛着関係の確立がこの目的にかなうことを明らかにした。愛着関係パターンについてはエインスワース（1978）1）の提唱した「新奇場面法」（Strange Situation Procedure, SSP）を使うことにより客観的に観察でき、いくつかのパターンに分類できることが報告されていた。この方法はいくつかの場面設定（エピソード）を行いながら、幼児の母親への愛着の度合いを評価するものである。1歳半健診にて、1）有意味語が全く出現していない、2）対人関係の綿で他者に関心を示さなかったり、拒否をしたりする、3）同一性への固執がある、の3徴候を持つ児を自閉性障害を主特徴とする発達障害のハイリスク児としてピックアップし、以後の発達をフォローした。また、彼らが3歳に達した時点で発達障害として診断できるか否かを検討した。ハイリスク児17名でSSPを用いて、母親、ストレンジャーとの愛着状態を評価したところ、その両者に対して同室からの入、退室に全く無関心、無反応を示すパターン（I型）と母親の退室に対して激しい情緒反応を示しながら、母親入室後の再会場面でよろこびの表情を示さなかったりするパターン（II型）の二種類があることがわかった（表1参照）。しかも、これらの子供達が3歳になった時点で再度、診断を行ったところ、この愛着関係のパターンと予後との間にある一定の関係があることが示された。これは表2に示したが、I型からはほとんどの児が自閉症と診断されたのに比し、II型からは社会性障害をほとんど示さない特異的発達障害が出現していることが明らかになった。

さらに、我々は母子愛着関係の他にそれよりも発達的には早期に出現する、共同注視機能を表現するいくつかの行動パターンもチェック項目として有用であることを明らかにした。例えば、要求の指さし、対象指示の指さし、叙述の指さし、指さし理解、遊びの中での大人の行動の模倣、母親参照視などの行動が自閉性障害を疑わせるハイリスク児では3歳になるまで出現していないことが判明した。

表　1

ハイリスク児のSSPに置ける二つのタイプ

1．母親、ストレンジャーに対して共に退室、入室に無関心、情緒的反応も示さないタイプ（I型）

2．母親の退室に対して長時間泣き続けたり、パニックになったりして反応する、また、母親の再入室に対しても機嫌がなかなか元に戻らないタイプ（II型）

| | | I/II |
|---|---|---|
| 1. NA | f | II |
| 2. YK | m | II |
| 3. TK | m | I |
| 4. MT | m | I |
| 5. MH | m | II |
| 6. KT | m | I |
| 7. SO | m | I |
| 8. TN | m | II |
| 9. SY | m | I |
| 10. KN | m | I |
| 11. YY | m | I |
| 12. NI | m | I |
| 13. TM | m | I |
| 14. SN | m | I |
| 15. SO | m | II |
| 16. YH | f | I |

考察：

1歳半児に把握できる発達障害のハイリスク児に社会性障害が含まれているとその予後は早期に療育を開始しても困難であることを指摘した。そのために、従来、1歳半健診であまり考慮されなかった、母子愛着関係確立度、共同注視機能をチェックすることが必要であることを強調したい。

文献：

1）Ainsworth MDS, Blehar MC, Waters E, Wall S : Patterns of Attachment : A Psychological Study of the Stranger Situation. Hillsdale, 1978

表2　発達障害ハイリスク児の3歳時予後

| | | 母子愛着関係型 | 診断 | 対人関係 | 言葉 | 同一性 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. NA | f | II | SDD suspect | well | alternate | slightly |
| 2. YK | m | II | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 3. TK | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 4. MT | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 5. MH | m | II | SDD suspect | well | a few words | slightly |
| 6. KT | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 7. SO | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 8. TN | m | II | SDD suspect | well | alternate | none |
| 9. SY | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 10. KN | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 11. YY | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 12. NI | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 13. TM | m | I | SDD suspect | well | alternate | slightly |
| 14. SN | m | I | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 15. SO | m | II | I.Autism+MR | very poor | no speech | severe |
| 16. YH | f | I | MR | well | a few words | none |

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:
発達障害の早期発見・早期介入を図るためには日本の１歳半健診を用いて発達障害に対するハイリスク児をピックアップし、以後、短期間の間隔を置いて発達評価を繰り返しながら、早期介入を始めていくのが有効な手段であると考えられる。そのために、1 歳半健診の場で発達障害ハイリスク児を見つけるためのチェック項目の検討とにの選択された項目を実際に１歳半健診の場で応用してみて、得られた結果を検討することを目的として本研究を行った。母子愛着関係の確立、共同注視機能、母親参照視などの行動指標が自閉症、発達遅滞、特異的発達障害の早期発見のために有効であることを確認した。